

「ほら♥こうすると、もっと大きくなるよ♥」ヒマリはそう言うと言自身のデカチンの根元を強く握った。「ぼわっ♥」、さらに大きく膨らむ亀頭。

「どひい〜♥ドエロいい♥ドエロいい♥皮が完全に剥けて♥亀頭の形がエグいい♥」

目をハートにして、ヒマリのデカチンに完全屈伏するルキ。

「ルキ♥すげー気持ちいいよ♥」

ヒマリはそう言うと言、ルキの口からデカチンを抜き、後ろを向いて、ルキに尻を突き出した。

「ひいあ〜♥ヒマリ様あのお尻♥ベロンベロン♥」

ルキはヒマリの引き締まった真っ白い美しい尻を舐めまわした。

「はい♥ルキ、ご褒美いい♥」

そう言うと言、ヒマリは尻を後ろ手に掴んで広げ、アナルを大きく広げて見せつけた。

「あっへええ♥ご主人様のお〜♥アナル♥・・ナルナルう♥」

ルキは自慢のデカチンからお汁を大量に漏らしまくりながら、興奮でピクついている。

「ほらあ♥ボクのアナルしゃぶりながら、チンコキ続けろお♥」とヒマリ。

「ぐっちゅ♥♥」ルキは、勢いよく舌をアナルに突っ込むと、

「レロン♥レロン♥レロン♥レロン♥」アナルの中を舌でかき回し、

「シコシコシコ♥シーコ♥シーコ♥シコシコシコ♥」

両手でヒマリデカチンを包んでチンシコしまくった。

「にゅうらん♥マジパネえ♥マジパッネえ〜♥ルキ、エロ過ぎ♥おほお〜♥」

膝に手を当て、ガニ股でガクガクするヒマリ。

「お★！！・・・おほお・・・★！！・・・うおっ★★★」

俺は二人の変態行為に目が釘付で、痛いほど包茎チンポを勃起させていた。

「ダダ・・ダーリンが放置じゃん♥・・こらあ♥ル・・おほお♥・・ルキィ♥お・・お前のアナルもお・・アヘアヘアへえ♥・・舐めさせて・・おひい♥やれ・・はあん♥」アヘりながらルキに命令するヒマリ。

ルキはひざまずいていた態勢を起こすと、ルキ自身もガニ股の格好になり、尻を俺に向けて左右に振り回した。

「舐めろ」という合図なのだろう。興奮しまくった俺は、無様にルキの尻の前にひざまずくと、ゆっくりとアナルを舐めまわした。俺がルキの尻穴を舐めるたびにビクンビクンとルキの尻がビクつく。ルキは左手で俺の頭を後ろ手に掴むと、グイっと尻に押し付けた。

「もっと舐めろ」ということなのだ。俺はルキの尻を両手で掴むと、必死に舐めまわした。

「ルキ♥チンポも舐めろよ♥」

ヒマリはそう言うと言、自身のチンポを股の間から後ろに向けた。

「はい♥舐めますう〜♥」ルキは後ろ向きになったデカチンを大口を開けて受け止めた。

「くう〜♥やっぱり、上手いわ〜♥先っぽがあ・・食べられちゃってるう♥」

ヒマリの喘ぎ声が聞こえる。

「アヘアヘ♥包茎デカチン様あ〜♥」